

発 刊 に 寄 せ て

わが国の農業技術の発展は、戦前においてはその多くが品種改良、肥料の増投技術にみられるように、もっぱら土地生産性の向上に集約され、いわゆる多肥多労農業を特色としてきたが、戦後は農業をとりまく社会経済条件も戦前のそれとは様相を異にし、農業技術の発展にも大きな変革がもたらされた。

ことに戦後高度成長を遂げた他産業と農業との生産性および所得の格差是正を図るため、農業部門における労働生産性の向上が急務となり、労働投下量の大きな稲作の耕耘、除草作業を中心に新技術の開発普及の育成強化が図られてきた。

除草剤による除草作業の合理化は、昭和24年に水田雑草の選択的防除法が確立したのを契機としてその後相次いで優れた除草剤の開発普及により急速にすすめられ、水稻の直播栽培など波及的に農業技術全体に画期的な技術革新をもたらした。

除草剤による雑草防除技術の確立によって、水田、畑、果樹園、林野等における炎天下の激しい除草労働が軽減され、同時に雑草による養分収奪の障害、病虫害繁殖の好適環境が排除さ

農林省農政局長 森 本 修

れるなど除草剤の使用が農業生産性を向上させた功績は測り知れないものがある。

また、生育調節剤は、作物の生育を人為的に調節することにより、農産物の生産量および商品性を高めるなど新しい技術分野として期待が寄せられている。

今日おかれているわが国の農業は、若年層を中心とした農業労働の減少、急速な兼業化の進行、農業労働力の質的な劣弱化など農業生産をめぐっていろいろ困難な条件のもとにあるが、これらの諸情勢に対処しながら農業生産を一層向上させるためには、さらに優れた新技術の開発普及が必要となってくる。

最近における除草剤および生育調節剤の発展はめざましいものがあり、なお多くの改良すべき点や未開発分野が残されているので、今後一層の御努力が望まれる。

このときにあたり、機関誌「植調」を発刊されることは、誠に時宜を得たものであり、本誌を通じて関係者各位ははじめ広く一般の除草剤および生育調節剤についての認識と理解を深められ、農業生産の安定と農業経営の合理化に貢献されんことを期待する。

発 刊 に 寄 せ て

農林省農林水産技術会議事務局長 近 藤 武 夫

財団法人日本植物調節剤研究協会が、昭和39年に関係官民の総意によって設立されて以

来、ここに4年目を迎えるが、今日立派な成長を遂げつつあることは、大変喜ばしい。

除草剤が農業生産性、特に除草労力の軽減化に寄与している成果はめざましいものがある。すなわち、使用面積は年々増加し、昭和41年度には水田300万ha、畑地60万haに達している。また、使用農家戸数は総農家戸数の75%に及び、これが使用によって節約される労力は数千人とみられている。最も過重な除草作業は最も軽作業化され、さらに機械化農法を可能にし、農業の近代化に著しい貢献をもたらしている。

しかし、現在の除草剤の中にはその作用特性によっては作物への安全性や除草効力などに万全とはいわれず、また魚貝類に対する毒性にも問題が残されているため、なお今後の改良開発にまつべき点が少なくない。

一方、生育調節剤は、現在あまり見るべきも

のがないが、この開発が最近問題となっている。作物の生産安定、収量性の向上の面から極めて重要な課題で、有効物質の早急な開発が求められている。このような観点から当省においてもケミカルコントロール研究推進協議会を設け、積極的に研究を進めている。

以上のように、除草剤、生育調節剤は今後の農業発展のうえに大きな役割を果たすもので、そのためには関係者各位の一層の努力にまつところが多い。

このときに、日本植物調節剤研究協会が、この部門における行政、技術面の動向や今後の方向などを中心にしたPR誌「植調」を発刊することを決められたことは極めて有意義なことで、その成果を心から期待するものである。

発 刊 に 寄 せ て

東京大学農学部教授 戸 莉 義 次

終戦後間もない昭和21年、私は農林省農事試験場の作物部長であった。日本は工業発展を禁止され、農業国としての存在が許されるという傾向にあったので、農業研究の部門を拡げるのは割に楽であった。部員の意見を聞いて部の編成や拡充を考えているうちに、将来の研究分野として除草技術の発達をはかるべきだとの意見が、若い人から出され、私は深く考えさせられた。的を射た発言だと感心し、色々と検討した結果、雑草防除研究室を設ける決心をし、みんなにはかって讃成を得た。

ところが、雑草は作物ではない。それを作物部で取りあげるのとは名目上どうもおかしいというわけで、その処置に困った。当時鴻巣の農事

試験場には作物部のほかに技術部と農具部があり、技術部長はさきの農業技術研究所長の今井さんだった。雑草防除研究室は作物部ではおかしいが技術部所属とすれば格好がいいので、今井さんを説得して、研究室員を作物部から選出することを条件に承知してもらった。

新しい分野を開拓するためにはち密な計画と大胆な行動力を必要とする。室長の人選には苦心したが荒井正雄君をマークして懇請した。なかなか承知しなかったが、遂に承諾されたのが雑草研究室の創まりである。前に山崎守正さんの塩素酸カリ、抗毒性の種類間差異といった着想はあったが、ともかく白紙から出発しようというので、内外の文献調査から始めた。ちょう